

シュフ ウシュフ
Chouf Ouchouf

乗越たかお(作家・ヤサぐれ舞踊評論家)

ずっと待っていたわけである。ヨーロッパのダンスが美術偏重になって久しい昨今、問答無用に動く衝撃、踊る快感を味あわせてくれる舞台の登場を。

そうしたダンスへの欲求は世界的にも高まりつつあり、今後ダンスの鉱脈になると筆者は考えている。中でも注目されているのは、ストリート・ダンス系やサーカス系を採り入れたダンスだ。そのための試みは早くから行われていたが、ほとんどうまくいかなかった。とかく「技自慢」になって、作品中で浮いてしまうからである。

どんなに卓越した技でも、続けて見ていれば飽きるものだ。ひとつの作品として創るためには、「優れた身体性」を深いところで理解し、分解し、作品の大きな流れの中で再構成しなければならない。そして美術的な面でも、今のダンスと同じ質の高さを持っていれば、なお良し。そういう「ハイレベルな美術に屹立しうる、強い身体性」「最先端の鋭さと根源的な強さを持った舞台」こそが、これからのダンスだと目されている。

その最有力が、スイスを拠点とするズィメルマン&ド・ペロである。筆者が長く来日を心待ちにしていた二人だ。その斬新なスタイルから「ヌーヴォー・シルク(フランス語で「新しいサーカス」の意)」「アート・サーカス」など呼称は様々あるが、とにかく「新しい舞台芸術」として、世界中のフェスティバルで引っ張りだこの存在なのである。

過去作品は、舞台の床が常に斜めで傾き続ける『Ôper Ôpis』や、マス目状に区切られた四つの部屋がグルグル回っている『Hans was Heiri』など。実際の世界がそうであるように、不安定な舞台の上でパフォーマンスが展開される。ときに人は翻弄され、バランスを崩す。だがそれでも必死で存在し続ける身体が示されるのである。

今作では、そういう不安定の要素は少ないが、大地を踏みしめる中での力強い技が繰り出される。城壁のような、一見シンプルに見える舞台装置が使われ、しかも様々に様相を変えるのも見どころだ。



今回彼らが振り付けたのが、モロッコのタンジール・アクロバティックグループである。北アフリカに位置しつつスペインと海峡を挟んで近接しているモロッコは、多様な人種や文化が複雑に混ざっている。

サーカス学校もあり、伝統的に大道芸でのアクロバットも盛んで、海岸では砂浜の上を身体一つで飛び回る姿が見られる。注目を集めた『Taoub』という彼ら自身の作品も、身体の技が主体となっているが、今作でもロープや布など道具はほとんど使われない。中にはストリートダンスというパワームーブにあたる驚愕の技も出てくるので、そちらのファンも楽しめるだろう。

じつはこの作品にはもう一つ重要な要素がある。それは全編に流れる歌である。彼らにとって、歌は生活に不可欠なものだ。

タイトルは「見て、もっとよく見て!」という意味で、もちろん鍛え抜かれた身体に我々の目は釘付けになる。だが最後、情緒豊かな歌とともに観客の網膜に広がるのは、南にサハラ砂漠を従えるモロッコの広大な地平と、そこに生きる人々の姿なのである。

TACT / FESTIVAL 2013

Zimmermann & de Perrot

Chouf Ouchouf

performed by the Groupe acrobatique de Tanger

シュフ ウシュフ